

## 編集後記

本『北東アジア研究』別冊第2号は、さる2010年11月15日復旦大学において開催された島根県立大学・復旦大学国際問題研究院合同シンポジウム「東アジア共同体の可能性」の研究成果にもとづき、発表原稿を充実させ、あらたに宇野重昭（島根県立大学名誉学長）先生、および韓東育（東北師範大学歴史文化学院院長、教授）先生にもご協力いただき、現時点における「東アジア共同体の可能性」に関する最新の研究成果をまとめたものである。合同シンポジウムは、以下のようなスケジュールで行われた。

開会の挨拶

本田雄一 特別講演「〈東アジア共同体〉の重要課題としての地球温暖化問題」

【第一セッション】

司会：井上厚史

報告① 佐藤壮「東アジア地域協力における多国間主義とガバナンス論—〈東アジア共同体構想〉に向けて」

報告② 沈丁立「北東アジア安全体制—2010年の激動が促進した新制度構築—」

コメンテーター 張忠任

【第二セッション】

司会：石源華

報告③ 張忠任「東アジア経済協力における三つの可能性について」

報告④ 魏全平「中日経済関係の変化と東アジア経済の一体化プロセス」

コメンテーター 宋国友

【第三セッション】

司会：佐藤壮

発表⑤ 井上厚史「儒教は「東アジア共同体」の紐帯となりうるか」

発表⑥ 蔡建「北東アジア文化アイデンティティの構築—困難な状況とその出口—」

コメンテーター 包霞琴

【会議閉幕式】

司会：郭定平

総括① 井上厚史

総括② 石源華

閉会の挨拶

当日は、復旦大学国際問題研究院の立派な会議室において、同時通訳付きの行き届いた

環境の中で、各報告者が「東アジア共同体の可能性」について自由に研究発表を行い、活発な議論が交わされた。会議終了後今回のシンポジウムの盛り上がりを受けて、報告書を作成しようという話が持ち上がった。

日本に帰国後、報告書の編集を一任された井上は、各報告者に発表原稿の修正版の提出を依頼し、あらためて全体の構成を再考していたとき、本学の李曉東教授が主催する「交錯する北東アジアアイデンティティの諸相」研究会が開催された（2011年3月3日島根県立大学浜田キャンパス会議室B）。「中国の北東アジア研究の現段階」というテーマのもとに、韓東育・東北師範大学歴史文化学院院長：教授が来学され、「東アジア研究の問題点と模索」という発表をされたが、その内容は「東アジア共同体の可能性」を考える上で大変示唆に富むものであり、研究会終了後すぐさま、ぜひ報告集に〈特別寄稿〉として掲載させていただきたい旨をお伝えし、快諾をいただいた。

各報告者の修正原稿が集まった段階で翻訳・編集作業に取り掛かったが、復旦大学の先生方の力作原稿に加え、韓東育論文は中国史（とりわけ哲学史）を俯瞰するような広大なスケールの大論文であり、日本語への翻訳作業は困難を極めた（実際、韓東育論文の当初の翻訳はあまりに誤訳が多かったため、井上が李曉東北東アジア地域研究センター長に協力していただきながら一からやり直すという緊急事態に陥った）。そんな折しも、本学名誉学長である宇野重昭先生が長年の「北東アジア学研究」に対する思いをまとめられた北東アジア学創成シリーズ第1巻『北東アジア学への道』（国際書院、2012年11月）が上梓された。同書中には「東アジア共同体」への言及も当然のごとくあり、ぜひ宇野先生にわれわれの研究成果に対するコメントをお願いしたくなり、無理を承知で執筆をお願いしたところ、ご快諾いただき、長文の〈序言〉を寄稿してくださった。

こうした複雑な経緯を辿りながら、本書は復旦大学国際問題研究院との合同シンポジウムの成果に、韓東育論文、および宇野重昭〈序言〉を掲載して、完成したものである。この場を借りて、あらためて韓東育先生と宇野重昭先生に衷心より感謝申し上げる次第である。

また、編集作業が遅れたもう一つの要因として、2011年9月11日に当時の民主党野田首相による「尖閣列島国有化」宣言にともない、急速に日中関係が悪化したことがある。本学と復旦大学国際問題研究院との交流も一時的に「緊急停止」という状況に陥り、本報告集完成の意欲が大いに減退した。周知のように、日本は韓国とも竹島＝独島問題を抱えており、日中韓の間で激しい領土問題に直面している状況下において、「東アジア共同体」に関して議論することの意味が急速に薄れていくことを身をもって体験することとなった。しかし、周囲の喧騒を逃れながら、あらためて本学の研究拠点である島根県立大学北東アジア地域研究センター（NEAR）の設立意義を考えてみたとき、こうした困難な時期にこそ、NEARは国内外にメッセージを発信することが重要であることを再確認することとなった。

「異質性を尊重しながら、共同体を形成する」という様態は、私の専門に惹きつけて考えるならば、あたかも朱子学の「理一分殊」を想起させる。また、島根県津和野出身の西周は、『百学連環』の中で、「万物みなその真理あり。ゆえにこの真理を求むるがために、物について講究し、師について見聞し、心に信じて動ずべからざる、これその真理にして、これを講究見聞することは、これみな学なり。」「知はその上向を知るのみならず、またその下向を知らざるべからず。善を知るときはまたその害を知るがごとし、表裏ふたつながら之を知らざるべからず。君子は和而不同、小人同而不和と、これすなわち表裏なり。ゆえに学は善悪ともに知らざればその用なりがたし。」と述べている。私たちは、互いの異質性を強調して関係を疎外化させるよりも、表裏や善悪をともに理解しながら、一つの真理を求めて学び合うことが必要であろう。

復旦大学で開催されたシンポジウムの成果は、辺境の地である島根県浜田市に持ち帰られ、さらに中国東北師範大学の韓東育先生を迎える中で、一つの報告集に収斂することになった。宇野重昭先生の持論である「島根からの視点」を大切にしながら、北東アジアをめぐる時代の大きなうねりに関心を持ち続けたいと思う。

読者諸氏からの忌憚のないご批判、ご叱正をお待ちしています。

2013年5月31日

井上厚史 記